

## 首里城古事の森づくり

首里城古事の森育成協議会  
会長 照屋 寛孝



沖縄には、首里城や竹富島の伝統的な赤瓦の木造建築物を始め琉球漆器、三線など、独自の木の文化が育まれてきました。しかしながら、去る大戦時における陣地構築材の調達や未曾有の戦禍、そして戦後の復興資材のための乱伐等により、沖縄の森林資源は荒廃を極め、大径木はもとよりイヌマキ等の木材資源は枯渇してしまいました。

このため、首里城や識名園の木造建築物の復元には、台湾や他府県産のヒノキを使用せざるを得ませんでした。将来、これら木造建築物の修復が必要となったときに、出来る限り県内から供給できるよう、長期的な視野に立った大径木の木材資源の育成を図る取り組みが必要不可欠であります。

このような観点から、首里城古事の森育成協議会は、林野庁が推進する「木の文化を支える森づくり」を沖縄県においても実施する為、沖縄森林管理署の呼び掛けにより、平成 20 年に設立されました。現在の構成員は、沖縄県、国頭村、東村、森林・林業関係団体、沖縄美ら島財団、首里城友の会、学識経験者等、18 団体・個人です。当協議会の具体的な活動の場となる「首里城古事の森」は、沖縄森林管理署のお計らいにより、平成 20 年に国頭村安波国有林に 2.49 ヘクタール、平成 24 年に東村平良国有林に 0.68 ヘクタール設定していただき、活動に関する協定を締結しました。これまでに、イヌマキ、オキナワウラジロガシ、イジュ、フクギの苗木を約 1,800 本植えると共に、下刈、施肥等の保育管理を行ってきました。

平成 25 年には、初めての企画として、安波国有林での植樹活動に参加している安田・安波両小学校の子供たちを対象に、首里城と識名園の建築物における木材利用の状況を現地で観察し学習するための見学会を実施し、古事の森づくり活動の意義と重要性への理解を深めることとしました。首里城や識名園は初めての生徒も多かったが、感想として建物が予想以上に大きくて広いこと、漆塗りの柱、壁の美しさに感心したこと、古事の森で育てる木が将来、どう使われるかを実感したなどの、感想文が事務局にたくさん届きました。見学会のために、送迎バスを提供された国頭村、首里城の説明や入場料の免除など、ご協力をいただいた関係各位に感謝しています。

結びに、当協議会の事業運営資金に格別のご支援を賜っている沖縄県緑化推進委員会を始め沖縄美ら島財団、電源開発（株）石川石炭火力発電所に対し厚くお礼を申し上げます。併せて、今後とも構成機関及び構成員各位のご協力とご支援の下、100 年先を見据えた首里城古事の森づくり活動を、地道にそして着実に継続していけるよう念じております。その過程で、沖縄森林管理署長始め署員各位の一層のご指導とご尽力をお願いいたします。